

## 思い出すことごと

泉 武 夫

月報が400号を迎えるという。年12号として都合30有余年を数える勘定になる。私は助手として本学に就職するとすぐに社研所員に迎えられ、月報編集に係わりを持つようになった。当時は1号に2本の研究ノートの論稿が載るのが普通であったように記憶している。だいたい月に1号の発行が守られていたが、どうかすると、発行が滞ったりすることもあった。そんな時2カ月合併号といった苦肉の策をとったこともあったり、原稿が殺到して発行が連続し、まるで週刊誌だなど同僚と苦笑したものである。当時は月報はタイプで刻字されていた。出版社はたしか新晃社であったと思うが、大曲の能楽堂近くの同社と神田校舎の間を、若くして亡くなった坂牧さんと原稿や校正刷りを持ち歩いて往復したものである。また、校正も編集部が担当し、二人で読み合わせを行った。社研が生田校舎に移ってからは、出版社も時潮社を経て佐藤印刷所に移り、筆者校正が主となり、体裁も長大な論稿1本となり、隔世の感を禁じ得ない。時潮社といえば、刊行が大幅に遅れがちとなったり、困ったことを覚えている。

あれは生田に移って間もないころのことだと記憶しているが、月報100号を記念して筆者・論文の総目次を作ったことがあった。パソコンが登場する以前の話で、手書きで原稿用紙を埋めていった。出来不出来はともかく、これが社研で総目次を作った最初であったろう。

また、月報の論稿は業績にはカウントしないといった大物の発言が話題になったこともあった。現在ではこうしたウルトラ権威主義的な発言も全く過去のものとなった。月報が完全な市民権を得たことの証であろう。そのかわり逆に月報のディスカッション・ペーパーとしての機能が退化したという印象が避けられのも事実である。

即行性という月報の身軽さ故か、現在多くの所員に活用され、編集子が原稿集めに一時程に苦勞しなくても済むようになったのは嬉しいかぎりである。今後とも所員の手軽な発表の場として社研月報が愛され続けることを確信して、400号記念号への事務局からの寄稿要請に対する責としたい。